



生源寺眞一 著

『農業と農政の視野／完  
—論理の力と  
歴史の重み—』

本書の著者・生源寺眞一教授は、研究者として学界をリードし、農業経済学関連の複数の学会の会長を歴任する。さらに、現在、会長を務める食料・農業・農村政策審議会をはじめとする政策形成の場への関わりなど、その八面六臂の活躍は、本誌の読者では知らぬ者がいないであろう。

その著者の最新作が本書である。同じタイトルで著書が2010年に出版され（以下、「初巻」）、『続・農業と農政の視野』という「続巻」が2015年、そして「完結巻」となる本書により3部作のシリーズが形成されている。

この3部作の基本的構成はほぼ共通しており、パートⅠが「食と農の見取り図」であり、食料、農業のトピックスが集められているが、特に「視点・視覚のあり方を意識して、書き綴った」（初巻—「初巻からの引用」の意味）ものである。また、パートⅡは「揺れる農政」であり、「リアルタイムの（農政）評価」（同）であり、その基調は「辛口の言説」（続巻）である点、一貫している。そして、「農村の四季」と名付けられたパートⅢが「農村との接点をテーマに論じた単文」（初巻）であり、「結果的にパートⅡで高まったテンションを和らげるパート」（同）となっているのは、この完結巻でも共通している。

そして、この完結巻だけには、パートⅣ

「次の世代へ」があり、まさに「完」としての内実を備えている（続巻には「復興へのエール」というパートもある）。

本書には「論理の力と歴史の重み」という副題がある。この種のシリーズ本を編むときには、副題で各巻の内容の差を表現することが多いが、生源寺教授は、そのようなことは行わず、一貫した副題を付している。おそらく、そこに著者の強いメッセージが表されているのではないだろうか。それでは、いかなるメッセージか。実は、初巻のはしがきで、次のように書かれている。「ますます近視眼化する農政と長期の時間視野に支えられた農村。このコントラストが本書のモチーフである」。つまり、「農政の近視眼化」に対して「論理の力」をつきつけている。そして、「長期の時間視野に支えられた農村」から、「歴史の重み」を意識しようとしている。

こうしたモチーフがこの完結巻ではどのように具体的に現れているのか。初巻、続巻を知る者にとっては、本書の最大の関心事である。そこで、この点を、以下では見ていきたい。

まず、「論理の力」により、パートⅡで明らかにされたのは、さらに深まる農政の混迷である。前2巻は、それぞれ、民主党への政権交代、現政権への再交替の時期と重なっている。今回も、政権交代期の政策変化を「（農業にとっての）リスク・ファクター」として批判すると同時に、政権交代をともなわない、本来は静かな時期にもかかわらず生じる混迷を鋭く指摘している。

そのひとつは、「農業・農村所得倍増」である。周知のように、2013年の「日本再興戦略」として閣議決定されたものである

が、「根拠が薄弱」だけではなく、「威勢はいいけれども、長期の視野を大切にしてきた日本の農村の持ち味にはどこかそぐわない」という視点からの評価も行われている。

また、最近の農政の目玉とも言える農地中間管理機構（農地バンク）についても、「機構はあくまでも手段であって、それ自体が目的ではないことを強調しておきたい」とそこに孕む問題点を早々に指摘する。いずれの指摘も「論理の力」が買かれており、農政当局に対しての遠慮はない。

なお、パートⅠの食と農のトピックスは、いつもながらの広角さを保っているが、本巻では、技術進歩がしばし登場している点は見逃せない。特に、ICTと農業についての考察は、「暫定的な結論」とされているが、新たな切り込みが行われており注目される。

もうひとつのモチーフである「歴史の重み」は、パートⅢで著者の農村に対する深いリスペクトへとつながっている。たとえば、中山間地域の多面的機能の奥深さに対して、その経済的評価にかかわり「長く農村に接してきた一個人としての思いを述べるならば、お金に換算しなければ価値がわからないようでは困る」と論じているのは、まさに「歴史の重み」への畏敬から生まれる発言であろう。また、イギリスのEU離脱にかかわり、その顛末には、著者が現地で触れた「短期的・刹那的な収益に一喜一憂する世界とは一線を画し、地道な努力を尊重する風土」があるのではないかという議論は、国を超えた農村へのリスペクトを含む考察に他ならない。

このように見ていくと、「論理の力と歴史の重み」は、本シリーズのモチーフであると同時に、生源寺教授の農業・農村に接す

る時の基本的態度であることがわかる。学界をリードする氏の議論の魅力の淵源はここにあるとしても良いのではないだろうか。

先にも述べたように本書が前2巻と異なるのは、「次の世代へ」というパートⅣが末尾に位置していることである。その前半は農村計画学会、後半では農業経済学会の場で、著者の研究者としての経験を具体的に語った文章が掲載されている。いずれも軽妙なタッチながら、研究することの神髄が深く語られており、全文が若い世代へのメッセージである。本書を「完結巻」として、そこにあえてこのパートを設定した著者の思いを受けとめたい。

本書は、このように、多様な内容を持っている。いつも思うことであるが、真に優れた書物は、読み手の問題意識に応じて大きくその姿を変える。本書では、農政担当者、特に国レベルのその者には叱咤激励と新たな農政の「羅針盤の書」として。また、農村に居住する人々には、畏敬に溢れる静かで熱い「応援の書」として。さらに研究者には、仮説が惜しげもなく披露された「宝の書」として。なかでも、若い研究者には、それに加えて「研究とは何か」を語る「伝承の書」として。そして、一般の人々には、食と農の奥深さを縦横無尽に語る「知的探求の書」となろう。

多くの方が、それぞれの立場で、この書の神髄に触れていただきたいと心から願いたい。

——農林統計出版 2017年3月

定価1,800円（税別）232頁——

**(明治大学農学部 食料環境政策学科 教授  
小田切徳美・おだぎり とくみ)**